**SDGs ―見失いたくないもうひとつの視点－**

**淺 間 正 通 (静岡大学名誉教授)**

「持続可能な開発目標」、すなわちSDGs(Sustainable Development Goals)という言葉がここ数年世界各国で盛んに連呼されるようになってきた。当初見られたような国や行政などの標語の中だけではなく、昨今では地域ボランティアの人々が、SDGsに付随する17の目標に因んだ17色に彩られたバッジを着けて活動する様子や、SDGsを冠言葉としたプロジェクトを立ち上げて社会貢献に尽力する企業が多々現れるなど、その活動の裾野は着実に広がり始めている。実際、株式会社電通が2022年4月に公開したNEWS RELEASEの中の第5回「SDGsに関する生活者調査」結果では、SDGsの認知度が前年の第4回調査から30ポイントも上昇し、86％にもなった。また「内容まで理解している」という回答も前回調査の1.5倍となる34.2％に達している。なお、後者に関しては10代が52.5％と平均の34.2％を大きく上回っており、学校教育の場での啓発活動が大きく寄与している実際が垣間見られる。そのようなこともあり、10代の若者たちが学校内外の場において「食品ロス」や「環境」、「人権問題」などさまざまなテーマで盛んな取り組みを行っている。いずれにせよ、2030年に向け、あらゆる世代を巻き込んでSDGsへの関心が一層高まっていく流れに疑問の余地はなかろう。

しかし、SDGsの理念に共感したという理由だけで、妄信的かつ直接的な活動展開を企図する人たちがいる点に関しては、少々一考してみたいところがある。ここでは17の目標のうち、（目標8）「働きがいも経済成長も」、（目標12）「つくる責任 つかう責任」、（目標13）「気候変動に具体的な対策を」、（目標15）「陸の豊かさも守ろう」といった4つの目標に関わる【ペーパーレス化】の取り組みについて考えてみたい。たしかに、ゴミを無くすといった地球にやさしい取り組みは、まさに現時代的な要請であるといえる。その一方で、【紙】と対峙し、思考をめぐらせて書き落とし、消しゴムをあてて幾重もの修正を施して洗練化する「認め」の工程は、思考と身体が直接連鎖した行為であり、我々の歴史の中で英知の蓄積と文明の深化に関わってきた大切な作業である。しかし、書くという作業は文字変換や諸々の自動化などといったデジタル化と共に様変わりしてきた。機器が一枚噛むことからかそれを読む相手への意識が希薄となり、主に依頼や要求といった無機質な内容となりがちな上、打ち間違いや適切な句読点使用の軽視から生じる文意の取り違え、狭小画面をスクロールして内容を見返すことで生じる論理の文脈逸脱なども加わって、真意とかけ離れたところで時に大きな問題へと発展することもある。また、紙のリサイクルが即SDGsに寄与するという単純な問題でもない。現在の技術では数回の再生で強度が低下してしまうのだ。森林保護やカーボンニュートラルなどといった環境問題を睨みながらも、コミュニケーションのあり方や文化の継承などといった人間の営み全体への配慮も必要になってくる。したがって、SDGsへの蒙昧によって引き起こる単純な「ペーパーレス神話」には、絶えず伝統と向き合う視点も盛り込んでおきたいものである。

先人が紡いできた伝統的な価値の意味を再認識するためにも、そしてまたSDGsと真剣に向き合うためにも、古の叡智と科学技術とがどう折り合いをつけていくべきか、その意義を探索することこそが、今地球市民の物質生活および精神生活を支える今後の大切な座標軸となりえるのではなかろうか。